

ニュースレター第3号をお届けいたします。今号は韓国からご参加いただいた平田尚子様のお言葉とスタッフの岡内泰子が担当します。

『出来ることを 出来ない と 拒みはしない』

樋野興夫 (順天堂大学名誉教授、新渡戸稲造記念センター長、恵泉女学園理事長)



2023年3月18日『お茶の水メディカル・カフェ in OCC』に赴いた。今回は、韓国のソウル(Seoul)から 御夫婦 & 息子さんの3人と 静岡県浜松市から 御2人の看護師も参加されていた。筆者は、個人面談の機会も与えられた。今回は、ヘレン・アダムス・ケラー (Helen Adams Keller, 1880-1968) についても語った。

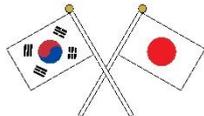
ヘレン・ケラーは、3重苦(聴力、視力、言葉を失う)を背負いながらも、世界各地を歴訪し教育・福祉に尽くした。【ヘレン・ケラーは、2歳の時に高熱にかかり、聴力、視力、言葉を失い、話すことさえ出来なくなった。両親から躰(しつ)けを受けることの出来ない状態となり、家庭教師として派遣されてきたのが、当時20歳のアン・サリヴァン(1866-1936)であった。サリヴァンはその後約50年にも渡って、よき教師として、そして友人として、ヘレンを支えていくことになる】。ヘレン・ケラーは、3度(1937、1948、1955)来日している。ヘレンとサリヴァンの半生は『The Miracle Worker』(日本語『奇跡の人』)として映画化されている。英語の【『The Miracle Worker』には『(何かに対して働きかけて)奇跡を起こす人』といった意味があり、本来はサリヴァンのことを指す】とのことである。ヘレン・ケラーが『人生の眼』を開かれたのは『いのちの言葉』との出会いである。学びは、『I am only one, but still I am one. I cannot do everything, but still I can do something; And because I cannot do everything I will not refuse to do the something that I can do. 「私は一人の人間に過ぎないが、一人の人間ではある。何もかもできるわけではないが、何かはできる。だから、何もかもは出来なくても、出来ることを出来ない と 拒みはしない』(ヘレン・ケラー)。大変有意義な充実した貴重な『お茶の水メディカル・カフェ in OCC』であった。

7年前、がんで母が天に召されて一時帰国した際にメディカルカフェのスタッフの方に誘っていただいて、OCCメディカルカフェに初めて参加させていただきました。韓国でもこのような働きかけは必要だと感じ、すぐにソウルでのメディカルカフェ開催のための手続きをしました。〈言葉の処方箋〉も韓国語に翻訳されがんの患者さんと接する機会の多い方に薦め皆さん感動され、一緒にカフェを始めましょうと呼びかけをしているうちにコロナ禍で一時中断、2023年、今年にはいつてからがんの患者さんと毎日接するような状況になり、今回夫と長男とともに参加させていただきました。樋野先生と面談をする機会をいただき素晴らしい時でした。「小学生でカフェを始めた人もいますよ。いま大学生になって続けているよ。」(YouTubeで見た女の子!)「誰にでもできるんだよ。忙し過ぎては駄目だよ、考える時間がなくなるよ。」私の生活を見透かされたと思う瞬間でした。

グループトークの時は、カフェのスタッフの方々のお一人お一人の素晴らしいお話し、また具体的な問題点、次の世代への橋渡し等々、和気あいあいとした暖かい雰囲気の中でお話しの内容にも感動をうけましたが〈傾聴〉する皆さんの態度もとても素晴らしいと感動しました。7年間、樋野先生を通して投じられた汗となみだの結晶が波紋となって心に響き合い、心に響き合った一人一人をとおしてまた波紋が広がり重なりあってゆく様子を目の当たりにしました。また午前中に訪問させていただいた淀橋教会でもカフェを開催されていて案内をしてくださった方にこれからOCCのカフェに参加することをお話した時に、とても熱心になん哲学の心得?を語って下さったことも印象的でした。

今回韓国人の夫と息子と参加することによって、韓国人の視点から見た場合メディカルカフェのはたらきがどのように組織立てていくことができるか、またネーミングも〈哲学〉という〈占い〉というイメージがあることなど考慮すべきことが色々あることがわかり、日本人のコーディネーターの方々の協力を得て近々ソウルで開催することが具体化されました。私自身も、コーディネーターの資格を取る準備として、朝のゴールデンタイムに読書しつつ祈りの時を持つことを実行しています。ソウルのメディカルカフェ開催の一步を踏み出すことができますよう心を砕いてくださる樋野先生をはじめスタッフの方々に感謝しています。これからもよろしく願いいたします。

ソウルより 平田尚子



「からっぽの器」をカフェに置くこと

4月に私たちのカフェ*は第50回目をむかえます。この地域にカフェが欲しいなという思いだけで出発。樋野先生と榎原先生の「言葉」のお力でオープンしたカフェです。OCCカフェの皆様が蔭に日向に支えてくださって実現しました。月に1回のペースで50回、あっという間と感じています。この間コロナや個人的なことでもいろいろあった中でしたが、休むことなく「からっぽの器」を置き続けて来られたことは奇跡のような気がしています。回数を重ねてきた今、私は「からっぽの器」を置くことの難しさを感じています。

先生は「カフェは誰でも出来るよ、空の器を置くだけでよい」と言われます。そして器をだんだん丈夫なよいものにして行けばよいというのです。実際にやってみると、まず「からっぽ」にすることがとても難しい。私が何かを入れてしまうからです。誰のために、この器を置くのかと考えることが「からっぽ」には大切なのではないかと思います。がん哲学外来カフェに参加して来られる方が一人でもいらしたら、器は満たされます。今日誰かと対話する「時と場」が必要な方の存在が、私がカフェを開く目的。その方のお話の事柄は話すまで分かりません。器はまず空である必要がここにあるように感じます。参加者が「からっぽの器」の中に、色々なものをそれぞれ入れてくれます。その入っているものの中から参加者は、今度は自分が欲しいものをピックアップして持ち帰るのです。私のイメージはこんな感じ。皆さんが、どんなにたくさん持ち帰られても中身が不足することではなく、私には全部残ります。私はつい自分の好みで、デザインの強いものや信楽の釉薬たっぷりの重い器とか個性的なものを置いてしまうのですが、始めに戻って「丈夫な器」を目指して出来るうちは参加者のお力をかりながら「からっぽの器」を置いていきたいと願っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

OCCメディカルカフェスタッフ・多摩川せせらぎメディカル・カフェ*代表/岡内泰子